



|            |   |
|------------|---|
| Title      | ポンペイ島の女性たち  |
| Author(s)  | 植木, とみ子   |
| Citation   | 長崎大学教育学部社会科学論叢, 40, pp.89-99; 1989  |
| Issue Date | 1990-02-28  |
| URL        | <a href="http://hdl.handle.net/10069/33548">http://hdl.handle.net/10069/33548</a> |
| Right      |   |

This document is downloaded at: 2019-03-25T06:04:00Z

## ポンペイ島の女性たち

植 木 と み 子

はじめに

1. 文明開花の波の中で

2. 村の女たち

3. 町の女たち

おわりに

はじめに

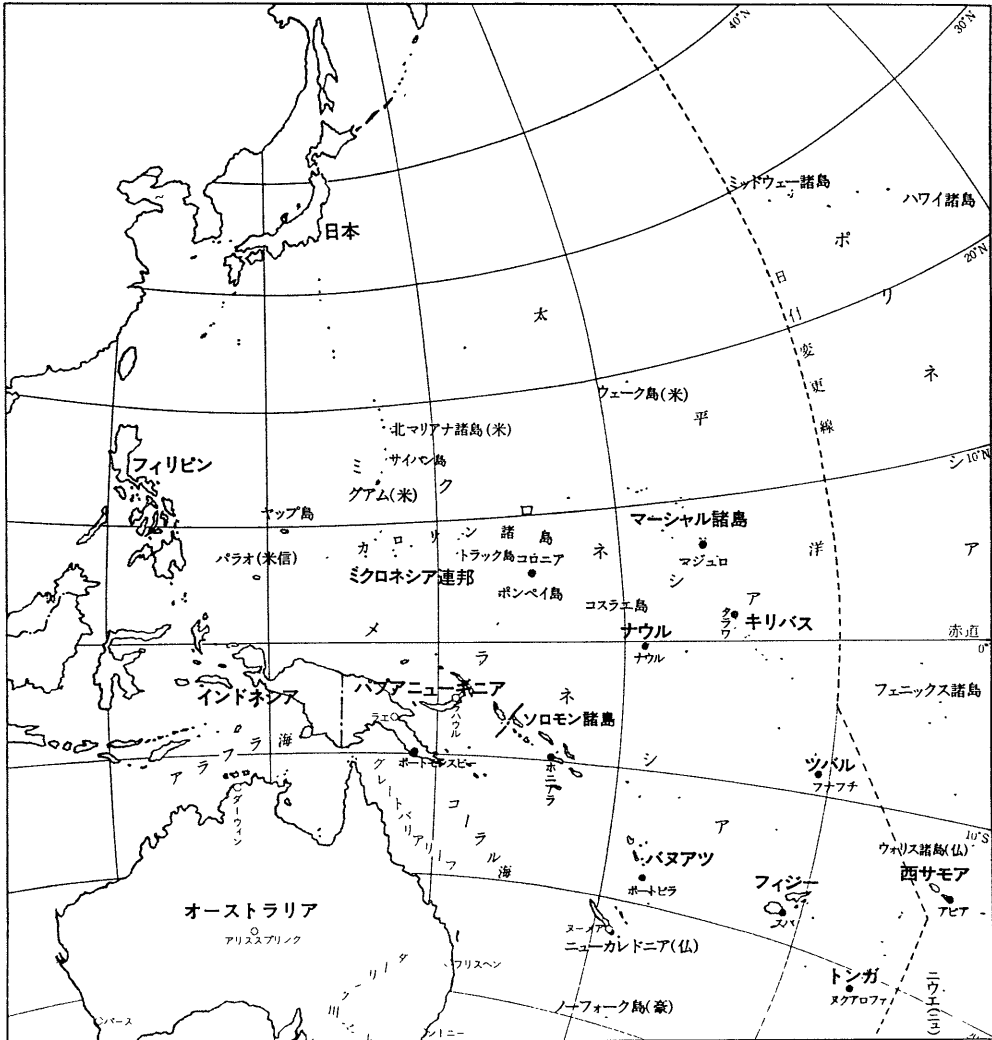
ポンペイは、かつてはポナペと呼ばれ、一九一四年から三十年間は日本の統治下にあった。わが国の敗戦とともに、国連の米国信託統治領となったが、一九八〇年代、ヤップ、トラック、コスラエとともにミクロネシア連邦を形成し、その首都となるにおよび、ポナペの現地語であるこの名称が正式に使用されるようになったのである。

北緯七度、東経一五〇度であるから、グアムより少し赤道に近く、ハワイ寄りに位置する。福岡国際空港からは、サイパン、グアム、トラックを経由して、八時間あまりで到着する(図1)。

ポンペイに関しては、これまで民族学的な調査報告書がいくつかあり、政治構造、親族形態、土地所有関係、相続、儀礼等については、ある程度明らかにされている。これらによれば、ポンペイでは基本的に母系相続が行われており、各自の出自、所属、特権、称号、位階、財産、トーテムなどの社会的地位は母系氏族により決定される。現在でも強力な機能を発揮している首長制もこの母系原理に従って構成され、大酋長ナンマルキの地位は一定の氏族の女性から生まれた男の年長者が承継する。しかし一方、人口の増加により、これまで比較的近隣に住んでいた同一氏族も、土地の不足から新たな土地を開墾しそこに移り住まなければならなくなってきたことや、日本統治以前のドイツ治下での地券発行に促されていわゆる近代的所有権が確立してきたことから、この伝統的な母系相続原理にもゆらぎが見られているということである。<sup>(1)</sup>

このような状況の中で、ポンペイの人々の実際の生活はどのように営まれているのか。それをとくに女性たちの日々の生活、意識の点に焦点を当てて、私たちのそれとどのように違うのか、どの点が同じなのか、ということに関して見てみようというのが、本稿の目的である。しかし何分にも初回の訪問であり、短い滞在期間での限られた範囲での聞き取り調査であるので、どこまで真実に迫ることができたのかは多少疑問として残る。そこで資料の客観性に関してはこれからの継続調査により明らかにすることとして、とりあえずは、今回の訪問によりインタビューし得た人々から得られた情報を、これまでの先行調査の結果と照らし合わせながら、より正確に再現するという方法で、目的の一端を果たした

図1



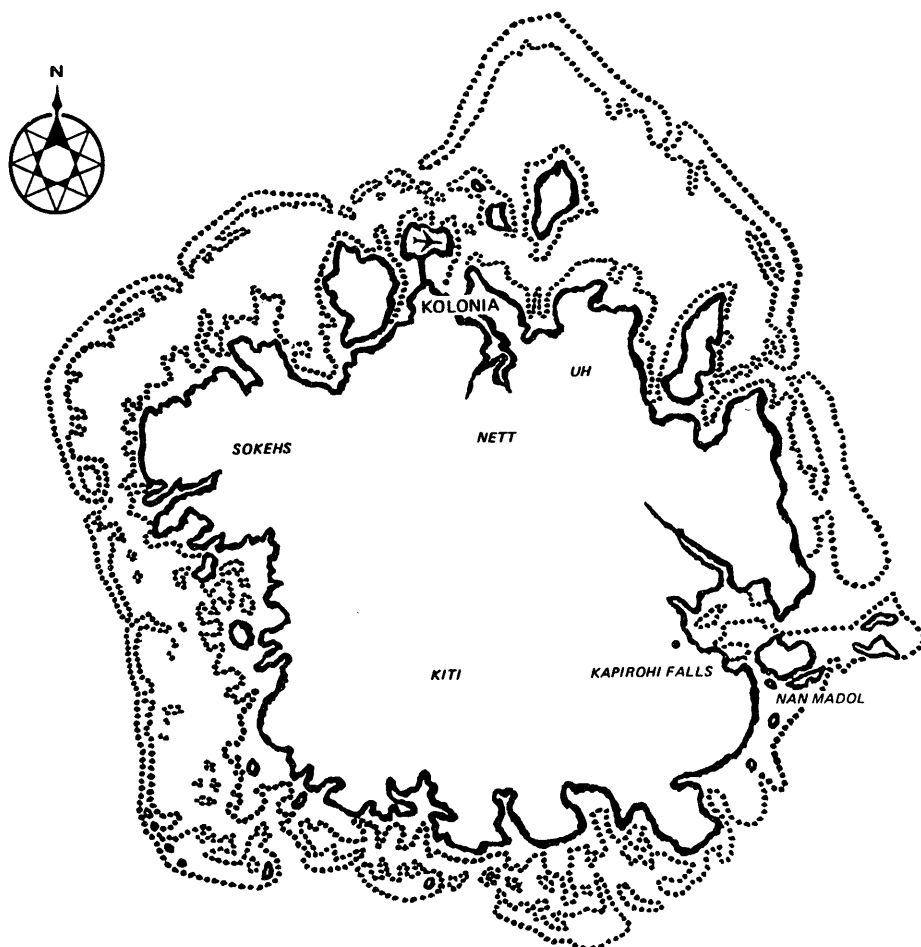
ミクロネシア諸島

いと考えている。

### 1. 文明開花の波の中で

ポンペイの人口は二万六千人あまりで、その中の六千人位がコロニア KOLONIA と呼ばれる町に住み、残りの二万人は農村部に住んでいる。村は、ウー UH, ネット NETT, ソークス SOKEHS, キティ KITI, マドレニウム MADORENIHMW の五つがあるが(図2), これら農村部には、まだ電気が引かれていない。水は雨水、スコールが一日五〜六度襲来するので、トタン屋根から落ちる雨水を、ドラム缶に溜めて置くのだ。もちろん、時計も新聞もラジオもない生活である。朝明るくなったら起き、暗くなったら寝る。

図 2



ポンペイ島

マングローブに覆われた海岸線の間に見え隠れする建物は、ほとんどまぎれもなく教会である。ポンペイ島ではこれまで人は集落を作らず、一般の島民の家はバナナやココヤシの葉陰に隠れるようにして点在している<sup>(2)</sup>ので、慣れた目にしかそれと映らない。一九世紀にこの島がスペインにより発見されて以来、キリスト教が熱心に布教されたため、住民のほとんどはクリスチャンである。日曜日には村毎にある教会に三々五々礼拝に集まる。そのため、曜日だけは皆忘れない。定刻の三十分も前になると、あちらからこちらから二～三人、あるいは四～五人と連れだって、なにやら楽しそうにおしゃべりをしながら、ブラブラと人が集まってくる。TOYOTA、NISSAN とペンキ塗りの古い軽トラックに乗りつけて来る者もいる。

子どもからおばあちゃんに至るまで女たちは実におしゃべりだ。大きな花柄の原色のワンピース、ヤシ油で塗り固めた髪には飾りを三つも四つも付けて、ピアスも忘れない。ちょ

うど日本の七五三の女の子のような感じである。しかし、足はすべてはだしにゴムぞうり。ここでは下着は貴重品なのだろうか、むしろ装飾のために人に見せるように付けられている。男たちは普段は上半身はだか度過すが、教会に集まる時だけは洗いきらしのTシャツを着ている。

実は、ボンベイの五十歳以上の人の中には、日本語を話す者がかなりいる。戦前日本の統治領だった頃は、国民学校が建設され、日本語が徹底的に教えられた。その後アメリカの信託統治の経過の中で英語が公用語となり、若い人たちはまったく日本語を解さなくなったが、第二次大戦中もここではあまり激しい戦闘がなかったため、日本人に対する感情はいたって良い。ビー玉、メンコ、パチンコなど、私たちの昔ながらの遊びも、ボンベイの子どもたちに今も伝えられており、教会の前庭ではずっと以前の日本での子どもの遊びの風景が繰り広げられている。もっとも若い人たちは、随分アメリカナイズされている。現在、若者に一番人気のあるスポーツは、バスケット・ボールであり、また、真新しいスニーカーを履くことが、彼らの夢でもある。

かつて建築の技術研修生として日本に三年間滞在していたことがあるというピーター・ラトーレ（二八歳）に出会ったのも、この教会の前庭だった。ボンベイで唯一のビューティ・ショップを経営する妻のリンダ・ラトーレ（二五歳）も、同じ時期に美容師の技術研修生として日本に来ており、二人はここで知り合った。このような研修生は、現在年間三〇名くらい日本に派遣されている。アメリカの統治から解放され、数年前に独立したこのミクロネシアの国々は、今自分たちの手による自分たちの国造りを目指して、百年前のわが国が欧米からいろいろ学んで来たように、日本やアメリカから、様々な技術を取り入れつつある。

ピーターは、これまではおもに木とトタンで作られていた家を、セメントの家に換えている。リンダの店にも一日に平均十人程度の客があり、パーマやカットを美容師の手にゆだねて行く。これまでは自分たちでやってきた家庭の仕事が、だんだん専門家の手に移りつつあるようだ。山合の谷間のようなところにポツンと建てられた、ピーターの手になるセメントで塗り固められた二人の作りかけの家には、まだ電気が引かれていない。夜の八時に懐中電灯の明かりを頼りに訪ねた家はすでに真っ暗で、こちらの呼び掛けに対する返事の後、間をおいてかすかなランプの明かりがポウッと灯もった。六畳位のいわばリビングだろうか、打ち放しのコンクリートの床の真ん中にゴザを敷き、隅には簡単な手作りの棚を置いて、衣類を重ねている。側にポリバケツが一つ置かれている。カーテンで仕切られた隣の部屋には、五か月になる赤ん坊がやはりふとん代わりのゴザの上で眠っている。四方に四角くりぬかれただけの、ガラスも何もはまっていない窓からはそよとも風がはいってこない。この暗く、蒸し暑い部屋のなかで、ランプを前にピーターとリンダは腕を組んだまま、私の質問に答えてくれた。

リンダ「日本に着いた時には、大きなビルディングがあり、電車が走り、テレビがあり、本当に驚きました。とてもよい経験だったと思います。でも、仕事から帰って来るアパートにはたった一人、随分寂しい思いもしました。」

ピーター「日本では『月月火水木金金』といわれて、仕事ばかりでした。それでたまに休めると外に遊びに行き、二〜三万円ポイと使って。自分でもバカバカしかったけれど、どうしようもありませんでした。」

リンダ「日本の男性はどうして日曜日に一人で遊びに行くのですか？」

今はピーターは町に友人と二人で建築事務所を持ち、月曜から金曜まで朝八時に家を出る。同じく町に店を持つリンダは八時半頃家を出て、少し山を登ったところで乗り合いの軽トラックのタクシーで出勤する。リンダが町に無料で借りているビューティ・ショップには、鏡と洗面台、椅子、化粧品入れのケースがあるだけだ。ここで午後の四時頃まで仕事をするのだが、「このごろ少し利益が出てきたので、家賃を払わなければと思っています」と言う。二人のいない間赤ん坊の世話をするために、家には近所に住む姪たちが頻繁に出入りしている。リンダは八人きょうだい、ピーターは十三人きょうだいの中で育ったのだ。土日は典型的な核家族、リンダは赤ん坊の世話をし、ピーターは家の前の海で魚釣りをして過ごす。でも「子どもが出来るまでは二人で遊べたのに、今ではその暇がありません」とリンダは少々不満気である。

ピーター「子どもは三～四人で、夫婦で楽しく暮らす方が良いと思います。」

リンダ「今、お金をすこしでもたくさん貯めるように働いているのだけれど、多分お金がたくさんあっても働き続けるでしょう。子どもの世話で大変なこともあります。でも仕事がないと寂しいと思います。お金が貯まったら？お金が貯まったら、二人で世界中を旅行して回りたいのです。」

リンダやピーターたちの若い力によって、最後の楽園の地、ここボンベイも文明開花の波に晒されている。

## 2. 村の女たち

「カスレリア（こんにちわ）！」

私たちが、朝七時に訪れたカニシア（二二歳）の家は、すでに食事の支度にてんてこまいだった。カニシアの嫁ぎ先のしゅうとアキオ・ベルナルド氏（六四歳）は、ウー村の酋長さんで、時にはボンベイ島を訪れる観光客に、古くから伝わるポナベ・ダンスを披露している。ボンベイ語には文字がないので、歌で様々な物語を語り継いで来たという。ポナベ・ダンスの歌にはそのような伝承の恋歌が多い。しかし現在ではそれを受け継ごうとする者も少なく、歌のもの悲しいメロディーにあいまって、アキオ酋長の寂しさが伝わって来るようでもある。

カニシアは一五歳の時に、隣のネット村から、当時二歳のアキオ氏の長男であるニーケルの下に嫁いで来た。現在六歳を頭に、二歳、一歳になる三人の男の子がいる。夫のニーケルは、母クラリセの血筋を受け継ぎ、ボンベイ島最高の権威者であるナンマルキになる権利を持っている。しかし、カニシアとニーケルの子どもは、ニーケルが母方から受け継いだ部族ではなく、カニシアの生まれた部族に属している。つまり、このボンベイでは、血縁は母系で迎られるのである。ところで、ナンマルキになる氏族と、その妻になる氏族とは決まっており、これら二つの氏族間のクロスカズン婚により、この子どもたちはナンマルキになる権利こそ持たないがナニケンと呼ばれ特別の地位を保持し、このナニケンの息子が次のナンマルキとなる。<sup>(3)</sup>

今は、アキオ氏が作った家でカニシアとニーケルとその子どもたち、およびアキオ氏の未婚の子どもたちが寝起きし、アキオ氏とその妻クラリセはすぐ側の隠居所で寝起きしているが、その他の日常生活は三代がほとんど一緒にしている。しかし、アキオ氏が亡く

なると、ニーケルは多分カニシアの生まれた土地に自分の家を作り、家族を連れて引っ越すことになるだろう。アキオ氏もほんの十年前、自分の父親の死とともに、妻の生まれたこの土地に移ってきたのだ。そして今は妻方の親戚に囲まれて生活をしている。これが、ポンペイにおける典型的な母系組続の形態であるが、現在ではこの原則は次第に崩れており、全体の三分の一程度を占めるのみとなっている<sup>(4)</sup>。

さて、私たちを迎えるために、カニシアはいつもより早起きをして、すぐ側を流れている川で洗濯を終えていた。ニーケルは山からヤムイモやタロイモを採ってきたし、アキオ氏は海に行き漁をしてきた。姑は胸を患っているので、あまり動き回らない。ここでは、何かがあるとすぐに親戚が集まり、その数は二～三十人になる。しょっちゅう来ているアキオ氏の娘やその夫たち、アキオ氏の妻の兄弟たちは一緒に食事の支度をするが、そうでない者たちは回りで見物している。

石を焼いて料理をするのは男の役目、鍋を使って煮炊きするのは女の役目と決まっている。子どもたちは、六歳から義務教育で三十分ほど歩いて学校に行くのだが、こんな時は休む子も多い。ココヤシの木に登り、その実や葉を切り落としたり、落とした実を削ったり、小さい子の面倒を見たり、男の子も実によく働く。

調理の終わった（といっても、そのまま焼いたか、煮たかただけであるが）食物を切り分けるのは、まだ姑の役目だ。カニシア「大切なことはまだお姑さんの役目、やっぱり嫌な気がすることもあります。そんな時は口をききません。」嫁、姑の確執はここでも同じなのだろうか。

食後はニーケルは山に畑仕事に行き、カニシアは普通この間に洗濯や子どもの世話をする。午後からは皆決まった仕事はないので、昼寝をしたり、タバコを吸いながらおしゃべりをしたり、それが毎日の日課である。

ポンペイ島は、淡路島の三分の二の大きさであるが、七百メートル級の山が多く、スコールが発生し易い。この高温多湿の自然環境の中で、植物は豊富に自生し、また回りは海であるから魚にも不自由しない。ここでは、基本的に人間は働かなくても生きてゆけるのだ。

カニシア「今一番欲しいのは、子どもです。特に女の子、何人でもかまいません。」

ニーケル「一番欲しいのはお金です。油、洋服、タバコ、薬、食べ物、買うためにはすべてお金が要ります。」

筆者「食べ物？食べ物はこんなにたくさんあるのに、もう要らないんじゃない？」

ニーケル「自分たちの食べ物たくさんあるけれど、あなたたちの食べている物も欲しい。それに、もうそろそろ自分たちの家を建てる準備もしなければいけないし。」

医療制度の整っていないポンペイには肺結核の人が多い。重症の患者は病院に収容されるが、軽症の者は家族の中で普通の生活をしている。また、ポンペイで最も多い事故はココヤシの木から落ちることだということで、その結果下半身不随になった者も多いと聞いた。彼らにとっては、薬は非常に高価なものなのだろう。しかし、私たちがこのような話をしている側で、まだ二～三歳のよちよち歩きの子どものプカプカとタバコの煙をふかしているのが、非常に奇異な感じを与えた。

お金を本当に欲しいと思っている人が、ここにもう一人いる。リサ・ベルナルド（一八歳）、アキオ・ベルナルド氏の末娘である。

リサ「ハイ・スクールには行かせてもらったけれど、ほんとうは町の友達のように、ア

アメリカのカレッジに行きたかったの。でも、その費用がなかったの。うちは、食べることには困らないけれど、他に現金収入ってあまりないでしょう。」

村の他の若物と違い、彼女の話す英語は流暢で、横稿のタンク・トップに真っ赤なジーンズ、大きな真っ白のイヤリングとそのままアメリカのダウンタウンでも通用しそうでたちである。しかし村に住んでいるかぎり、町に働きに出るのは容易なことではない。なぜなら、公共の交通機関がないので、歩いて行くか、ときたま気紛れに通る軽トラックの乗り合いタクシーを利用しなければならないからだ。歩くと片道二時間弱、タクシーでは二ドルはかかる。まだ町には、アパートメントは政府の職員か、商社の社員用にしか、建設されていない。

リサも今は、村の他の人たちと同じように、一日中何もせず、ブラブラ過ごしている。

リサ「はやく良い人を見付け、結婚して町に住みたいわ。そうすれば、働くこともできるし。お金が手に入れば、いろんな服も着れるし、もっと便利な生活ができるもの。それに、ここだと男の人と二人きりでいるのを他の人に見つかる、いろいろとうるさいのよね。デートも自由にできないのだから。」

ボンベイで最も伝統的な権威を誇る酋長の家の中にも貨幣経済は否応なく入り込み、それとともに若い人たちの意識もだんだん変化しつつある。

### 3. 町の女たち

ボンベイの町、コロニアのメイン・ストリートには国会議事堂、裁判所、警察署など、官公庁が並んでいる。しかしそのほとんどはトタンのバラック建てであり、六角形の国会議事堂だけが、近代的な建造物としての威容を誇っている。少し離れて公園のような敷地に緑に囲まれているしゃれた建物が図書館。もっともこの図書館を利用するのは、ほとんどがコロニア内にあるマイクロネシア・コミュニティ・カレッジの学生か、ハイ・スクールの学生である。カレッジには、ヤップ、パラオ、マーシャル諸島からも学生が集まり、やはりバラック建てのカレッジ内にある寄宿舎で生活をしている。彼らは自国の初等教育機関の教員になったり、病院の看護婦になったりすることを期待されているのであるが、ある者はグアムやアメリカの大学に進学し、そのまま島には戻ってこない。

コロニアには郵便局もあるが、これまた町に住む人たちのためだけの施設である。ボンベイ語には文字がないので、農村部の人たちにはそもそも手紙など無縁の存在だったのである。郵便配達制度はまだない。コロニアの住民はそれぞれ私書箱を持っていて、自分で受け取りに行く。一月の私書箱の賃貸料は五十セントである。映画、テレビの代わりにビデオ・ショップが人気を呼んでいるのも、この町の特徴である。

コロニアで最も大きい建物は、日本人の経営による三階建てのホテルである。しかし、ここにも酋長制が根強く残っており、土地はすべて酋長の所有であるため基本的に売買できず、そのためか外国資本は入りにくい。ほとんどの店が土地の人たちがバラック建ての薄暗い自分の家の一角を店舗に利用したものの、めったに客の出入りもないのではないかと思われるような構えの中で、このホテルやアメリカ人の経営する旅行エージェンシーのオフィスは、外装も明るく、ひときわ目立つ。クーラーのよく効いた小綺麗な部屋に入ると、安堵感からさすがの私たちも旅の疲れを覚え、いっとき灼熱の町の中に再び出て行くのがためらわれるほどである。



コロニアにはまた、大きなスーパー・マーケットが二軒ある。朝七時から夜九時まで営業しており、レジにパートの女性が一人立っているところなど、わが国のコンビニエンス・ストアと勘違いするほどよく似ている。売られているものは、冷凍肉、タバコ、米、インスタント・ラーメン、化学調味料、シャンプー、合成洗剤、スニーカー、Tシャツ、トイレット・ペーパー、カセット・テープなど多種多様であるが、さすがに野菜や魚など生鮮食料品はない。ここでも日本製の商品が至るところに目につく。

ここのパート従業員、エメリーダ・プリモは二七歳。グアムで知り合った彼と、親の目を盗んでデートを続け、七年前に結婚し、今では七歳、五歳、三歳の三人の子の母親である。夫はハイ・スクール卒業後、グアムにある米軍の海軍技術学校に行き、現在は、ミクロネシア連邦の公務員であるが、優秀な技術者として将来を嘱望されている。エメリーダは一年前から時給一ドル二五セント、一日七時間ここで働いている。このスーパーで売られている日本製の亀の子タワシに一個一ドル五十セント、四個入りのトイレット・ペーパーに二ドル四十セントという値段がついていた。

エメリーダ「ともかく早くたくさんお金を稼いで、家庭に帰りたいんです。やっぱり、子どもたちと一緒にいる時が、一番幸せです。」

子どもたちの話をしているとき、エメリーダの目はキラキラと輝く。「将来の夢？ それは、子どもたちをできるだけ上級の学校にやることです。そのためにも今私が働いていなければいけないんです。」

現在、ポンペイの全人口の四分の三が二五歳以下、二分の一が一五歳以下の子どもで占められている。1学年から8学年までの初等教育は義務教育で無償であるが、9学年から12学年までのいわゆる高等学校は公立が1つ、私立が2つあるのみで、入学試験にパスしなければならず、場所によっては寄宿舎に入らなければならない。いまのところエレメンタリー・スクール卒業者の三分の一だけがハイ・スクールまで進学する。それ以上の高等教育という、1学年100人程度を受容できるミクロネシア・コミュニティ・カレッジに入学するか、さもなければ、外国に留学するしかない。<sup>(5)</sup>

1985年の国勢調査によれば、ポンペイの労働力人口8,010人のうち、26.5%、つまり2,120人が公務員、21.3%が民間の被雇用者、30.8%が自作農従事者、残り21.4%は失業者となっている。現在自動車修理サービスや道路工事のためのさんご掘削業などの政府事業はほとんど民間に委譲され、また電力、水道、下水道といった事業もわずかながらではあるが、1986年に民間主体で始められた。<sup>(6)</sup>このようにして、自給自足に頼っていた伝統的な社会も、見る間に大変貌を遂げつつある。

私たちがポンペイに到着して最初に出会ったのは、エリタリーナ・セイオラという三十歳の女性であった。飛行機が遅れて、空港ロビーに入ったのが夜中の十二時近くだったが、男性と同じ紺色の制服、制帽に身を包み、キビキビと入国者をチェックしている姿が印象に残り、是非話をしてみたいものだと思ったのである。インタビューは上司の許可がいるということで、昼間彼女の勤務しているオフィスで実現した。

ビデオ・カメラを入れて撮影しているほんの一五分の間に、外からぞくぞくと人が集まる。エリタリーナは、同僚の顔をチラチラと横目で見ながら、他の人の迷惑にならないよう早く切り上げてほしいと私たちに催促する。

エリタリーナ「この仕事に就いてから五年になります。それまでは子どもが小さかった

ので、仕事はしませんでした。今、子どもは七歳ですが、住み込みのお手伝いさんに面倒を見てもらっています。出入国審査はとっても大切な仕事ですし、この仕事を通していろんな人たちと出会うこともできますので、誇りを持っています。」

彼女の月収は一千ドルあまり、かなりな高給である。この国の公務員の一年間の平均給与が七千ドル、だいたいこの位あれば、二つのベッド・ルームとシャワー、トイレ付きの立派な家が建てられる。彼女の出身の家がポンペイでは数少ないホテルを経営しており、夫とは幼な馴染み、その夫も連邦の高級官僚、つまり、エリタリーナはポンペイの上層階級に属しているのだ。

エリタリーナ「子どもは二人でいいです。教育にはとってもお金がかかりますから。」  
ここでも子どもの教育が、親の至上命題になっている。エリタリーナはさらに次のように付け加えてくれた。「私にとって一番大切なことは、家族が健康であること。今、望んでいることといえば、そうですね、立派な家を持ちたいし、他の人たちよりも便利で合理的な、より良い暮らしをしたいと思っています。」

今ポンペイの町では、「合理的」「便利」という言葉がさかんに使用されている。「より良い暮らし」を求めて、ポンペイの人たちは私たちの物質文明に非常な憧れを持っているようだ。反対に、私たちは自分たちの中に失われてしまった豊かな自然を求めて、はるばる旅をして来たというのに。

### おわりに

ポンペイは私たちが思い描いていたような、白い珊瑚礁と青い海に囲まれた、どこまでも澄みきった南太平洋の島ではなかった。青緑のマングローブは海岸線も判らなくなるようにおい茂り、側をカヌーで通り抜けると、アマゾンにでも来ているのではないかという錯覚を覚えるほどである。毎日繰り返される強いスコールにより痛めつけられたでこぼこの道は、日に照りつけられて水溜りが乾くと、たちまちほこりっぽい田舎道に戻る。

この道を何の日覆いもせず、はだしで、ブラブラと歩いている男性にチョコチョコ出会う。私たちには、まるで夢遊病者か薬物中毒者としか映らない。手には大きな蛮刀を持っているので、よけいに不気味な感じがする。実は、彼らは隣の村、あるいはもっと遠くの村まで所用で出掛けているのである。蛮刀は手土産にするためのシャカオを切るための用意である。シャカオはコショウ科の植物で、その根を石で叩き潰して、出てきた液を飲む。ちょうど歯医者が使う麻酔のようなものであるが、ポンペイの男たちは集まるとすぐにこのシャカオの宴会を始める。大きな木の陰で、あるいは川の側で、平たい大きな石を四方から囲んで、シャカオの石打ちをしている様子は、わが国の男性がマーシャン台を囲んでいる様子をほうふつとさせる。

このようなポンペイの村の生活は、新聞、ラジオ、テレビ等の情報から一切遮断されて、外界の出来事にはまったく関心が向かず、たとえどこかで大きな戦争が起ころうと、ここにいるかぎりしばらくは気がつかないのではないだろうか、心配されるほどである。しかし、それにもかかわらず、町には日本の製品があふれ、それを買うために村の人たちも「お金が欲しい」と真剣に考え始めている。

まずは物を買うために。しかしその買われる物の中には、私たちがすでにその存在に疑問を抱いている物も多くある。合成洗剤、私たちはより良い暮らしを求めて、合成洗剤追

放の運動をしてきた。その代わりに今私たちは、ポンペイにたくさんあるヤシ石鹸を求めているのだ。化学調味料、化学肥料、私たちは本物の味を求めて、有機栽培の重要性に気が付いた。ナイロン下着、湿気の多い暑い夏にはとても身に着けられるものではない。

これまでのポンペイの伝統的な柱とバナナの葉でふいた屋根だけの家から、セメントで塗り固めた家になれば、どうしてもクーラーが必要になるだろう。でもダニやノミや蚊の撃退から逃れ、スクールの降り込まない清潔な生活をしようと思うならば、やはり四方を壁で囲む必要があるのかもしれない。私たちの生活を見て、それを合理的な生活、便利な生活と思い、一生懸命それについて来ようとしているポンペイの人たちの動きをどうして止められよう。

よりお金を得て、良い暮らしをするためには、上級の学校に行き、他の人との競争に勝たなければならない。学校に行くためにはもっとお金が必要になる。ともかく働いて、現金収入を得なければ。この循環の中で、ポンペイの人たちもだんだん忙しくなっている。それとともに、これまで子どもの命そのものが宝で、たくさん子どもをほしがっていた女性たちが、より良く子どもを育てることを重要であると考え、少産の傾向に向かっていく。これもまた、わが国とまったく同じ道を歩んでいるようだ。

もっとも、「お金をかけるなら教育に」という気持ちはよく判る。スペインの領土であったことの名残は、キリスト教の布教ということで、今日でも立派に残っている。日本が信託統治時代に残した物はすべてついで去っても、日本語教育の名残は今に残る。

私たちがポンペイを離れるその日、酋長のアキオ・ベルナルド氏は、シャカオに酔った真っ赤な目をして、フラフラしながら、私たちを訪ねてきた。町の友人の葬式に行く途中、寄ったのだという。途中寄ったといっても、私たちの滞在している場所は酋長の家から二つも山を隔て、一時間はたっぷり歩かなければならない。私が前日酋長の家で貰いながらもそのまま置き忘れてきた花輪を、右手にしっかり持っていた。

酋長は、自分は日本人が好きだという。アメリカ人についてはよく殴られたし、子どもにタバコを教えてしまったし、あまりよく思っていない。日本人はいろいろなことを教えてくれたし、優しかった。「自分は日本には行ったこともないが、できるなら日本で死ぬたらと思っている。」

私たちに對する最大のお世辞だろうが、その時の酋長の寂しげな、すこし潤んだような深いまなざしが、ポンペイの今を象徴しているようで、私たちの心から消えない。

**記** 本調査は、徳本サダ子氏を会長とする「ミズの会」が主催した「アジア太平洋・ミズトークラリー」の一環として、「ミズの会」の費用で実施されたものである。調査に当たっては、「テレビ西日本」の樋口孝行ディレクターをはじめとする4名のスタッフが同行し、貴重な場面をフィルムに収めてくれた。この場を借りて、関係諸氏に深くお礼を申し上げます。

#### 注

- (1) 牛島、13頁。もっとも、林は父系的大家族ベネネイの存在を重視し、ポンペイの母系形態そのものが父系制への可能性を持っていたことを示唆している、92頁。
- (2) 牛島、12頁。

- (3) 牛島, 14頁。林, 92頁。
- (4) 牛島, 13頁。
- (5) Gene Ashby, 176-177.
- (6) Gene Ashby, 172.

参 考 文 献

- Gene Ashby, Pohnpei, An Island Argosy, Rainy Day Press, Revised Edition, 1987.
- 牛島巖, 『ヤップ島の社会と交換』, 弘文堂, 1987.
- 林研三, 「母系制社会の諸相—ボンベイ島」, 『比較家族史研究』第3号, 1988.
- 清水昭俊, 「石焼きをめぐるポナベ島民の生活文化複合」, 『社会人類学年報』2, 1976.
- 小宮清・新谷直恵, 『南の島グラフィティ』, みずうみ書房, 1986.
- 渡壁三男, 『ポナベ島〔続〕』, カンデラ書館, 1983.
- Bascon, W. Ponape : A pacific Economy in Transition, Anthropological Record 22. Univ. of California Press. 1965.
- 杉浦健一, 「南太平洋原住民の土地制度」, 『民俗学研究所紀要』, 1944.
- 矢内原忠雄, 『南洋群島の研究』, 岩波書店, 1940.